

# 数理解析研究所 院試過去問解答 専門科目(幾何)

nabla \*

2024 年 4 月 28 日

## 目 次

はじめに	2
平成 25 年度 (2012 年 8 月実施)	3
平成 24 年度 (2011 年 8 月実施)	5
平成 23 年度 (2010 年 8 月実施)	7
平成 22 年度 (2009 年 8 月実施)	10
平成 21 年度 (2008 年 8 月実施)	12
平成 20 年度 (2007 年 8 月実施)	14
平成 19 年度 (2006 年 8 月実施)	15
平成 18 年度 (2005 年 8 月実施)	16
平成 17 年度 (2004 年 8 月実施)	18
平成 16 年度 (2003 年 8 月実施)	21
平成 15 年度 (2002 年 8 月実施)	23
平成 13 年度 (2000 年 8 月実施)	24
平成 12 年度 (1999 年 8 月実施)	25
平成 11 年度 (1998 年 8 月実施)	26

---

\*Twitter:@nabla\_delta

## はじめに

数理研の院試問題の解答です。一部の問題には図がありましたが，入れるのがめんどくさいので省略してあります。解答が正しいという保証はありません。また，一部の解答は [math.stackexchange.com](https://math.stackexchange.com) で見つけたものを参考にしてしています。別解がある（かもしれない）場合でも解答は一つだけしか書いてありませんし，ここの解答より簡単な解答もあるかもしれません。この文書を使用して何らかの不利益が発生しても，私は責任を負いません。転載は禁止です。

## 平成 25 年度 (2012 年 8 月実施)

### 問 4

$\mathbb{R}^3$  の部分空間

$$X = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 \mid 0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1, 0 \leq z \leq 1\}$$

の商空間  $X_i (i = 1, 2, 3)$  を  $X_i = X/\sim_i$  により定める. ただし,  $\sim_1, \sim_2, \sim_3$  はそれぞれ次の関係で生成される  $X$  上の同値関係とする.

$$\begin{aligned} (x, y, 0) &\sim_1 (0, 1 - x, y) & (0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1), \\ (x, y, 0) &\sim_2 (0, 1 - y, 1 - x) & (0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1), \\ (x, y, 0) &\sim_3 (0, 1 - y, x) & (0 \leq x \leq 1, 0 \leq y \leq 1). \end{aligned}$$

このとき,  $X_1, X_2, X_3$  の整係数ホモロジー群  $H_*(X_i, \mathbb{Z}) (i = 1, 2, 3)$  を求めよ.

解答.

□

## 問 5

$\mathbb{R}^2$  内の部分集合

$$C = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid y^3 = (x - \alpha_1)(x - \alpha_2) \cdots (x - \alpha_n)\}$$

を考える. ただし,  $n$  は正整数,  $\alpha_1, \dots, \alpha_n$  は相異なる  $n$  個の実数である. このとき, 次の (i), (ii) を証明せよ.

(i)  $C$  は  $\mathbb{R}^2$  の滑らかな部分多様体である.

(ii)  $\frac{dx}{y}$  は  $C$  上の  $C^\infty$  級 1 次微分形式を与える.

解答. (i)  $g(x) = (x - \alpha_1)(x - \alpha_2) \cdots (x - \alpha_n)$ ,  $f(x, y) = g(x) - y^3$  とおく.  $C = f^{-1}(0)$  であるから, 0 が  $f$  の正則値であることを示せば良い.  $g' = \sum_{k=1}^n \frac{1}{x - \alpha_k}$  だから

$$df_{(x,y)} = \left( g(x) \sum_{k=1}^n \frac{1}{x - \alpha_k}, -3y^2 \right).$$

0 が  $f$  の臨界値であるとする,  $f(x, y) = df_{(x,y)} = 0$  となる  $(x, y) \in \mathbb{R}^2$  が存在する.  $-3y^2 = 0$  から  $y = 0$ . よって  $0 = f(x, 0) = g(x)$  から  $x = \alpha_1, \dots, \alpha_n$  となる. この時

$$g(x) \sum_{k=1}^n \frac{1}{x - \alpha_k} \Big|_{x=\alpha_i} = \sum_{k=1}^n \prod_{\substack{1 \leq j \leq n \\ j \neq k}} (x - \alpha_j) \Big|_{x=\alpha_i} = \prod_{\substack{1 \leq j \leq n \\ j \neq i}} (\alpha_i - \alpha_j) \neq 0$$

だから  $df_{(x,y)} \neq (0, 0)$  となって矛盾. よって 0 は  $f$  の正則値.

(ii)  $C \cap \{y \neq 0\}$  上では明らかに  $C^\infty$  級だから,  $C \cap \{y = 0\} = \{(\alpha_i, 0); i = 1, \dots, n\}$  上で  $C^\infty$  級であることを示せば良い.  $C$  の定義式から

$$2y^2 dy = g(x) \sum_{k=1}^n \frac{1}{x - \alpha_k} dx = \sum_{k=1}^n \prod_{\substack{1 \leq j \leq n \\ j \neq k}} (x - \alpha_j) dx$$

だから

$$\frac{dx}{y} = \frac{2y}{\sum_{k=1}^n \prod_{\substack{1 \leq j \leq n \\ j \neq k}} (x - \alpha_j)} dy.$$

右辺の分母は (i) で見たように  $x = \alpha_i$  で 0 にならないから  $(\alpha_i, 0)$  においても  $C^\infty$  級. □

## 平成 24 年度 (2011 年 8 月実施)

### 問 4

$S^1 = \{z \in \mathbb{C} \mid |z| = 1\} \subset \mathbb{C}$ ,  $T = S^1 \times S^1$ ,  $U = S^1 \times [0, 1]$  とおく. 連続写像  $f: \partial U \rightarrow T$  を

$$f(x, 0) = (x, 1) \quad (x \in S^1),$$

$$f(x, 1) = (1, x) \quad (x \in S^1)$$

により定義し,  $f$  によって  $U$  を  $T$  に貼り合わせて得られる空間を  $X$  とおく.

(i)  $X$  の整係数ホモロジー群  $H_*(X, \mathbb{Z})$  を求めよ.

(ii)  $X$  の基本群の表示を一つ求め, この基本群が非可換であることを示せ.

解答.

□

問 5

- (i)  $D$  は  $\mathbb{R}^n$  内の有界閉領域で、その境界  $\partial D$  は  $\mathbb{R}^n$  の  $C^\infty$  級部分多様体になっているとする。  $dV$  を  $\mathbb{R}^n$  の標準的な体積要素  $dx_1 \wedge \cdots \wedge dx_n$ ,  $d\sigma$  を  $\partial D$  の面積要素,  $\nu$  を  $\partial D$  の外向き法線ベクトル場とする。  $D$  を含む領域上で  $C^\infty$  級なベクトル場  $X$  に対し,  $i(X)dV$  を  $\partial D$  に引き戻したものが  $(X, \nu)d\sigma$  に等しいことを示せ。ただし,  $i$  は内部積とする。
- (ii)  $D$  を半径 1 の球  $\{x \in \mathbb{R}^n \mid |x| \leq 1\}$  とする。  $n$  次実正方行列  $A$  に対して

$$\frac{1}{\omega_n} \int_{\partial D} (Ax, x) d\sigma$$

を求めよ。ただし,  $x$  は  $\partial D$  の点であるが,  $\mathbb{R}^3$  のベクトルと考えて  $(Ax, x)$  を定めるものとする。また,  $\omega_n = \int_D dV$  とする。

解答. (i)  ${}^1T_x(\partial D)(x \in \partial D)$  を  $\mathbb{R}^{n-1}$  と同一視する。  $\iota: \partial D \rightarrow D$  を包含写像とし,  $X' = X - (X, \nu)\nu$  とおく。この時

$$\iota^*(i(X)dV) = \iota^*(i(X')dV) + (X, \nu)\iota^*(i(\nu)dV) = \iota^*(i(X')dV) + (X, \nu)d\sigma.$$

$\partial D$  の一次独立な接ベクトル場  $X_1, \dots, X_{n-1}$  を任意に取る。  $(X', \nu) = 0$  だから  $X', X_1, \dots, X_{n-1}$  は一次従属。よって

$$i(X')dV(X_1, \dots, X_{n-1}) = dV(X', X_1, \dots, X_{n-1}) = 0$$

だから  $i(X')dV = 0$  となり示された。

(ii) (i) で  $X = Ax$  として

$$i(Ax)dx_i = i\left(\sum_{j=1}^n \sum_{i=1}^n a_{ij}x_j \frac{d}{dx_i}\right)dx_i = \sum_{j=1}^n a_{ij}x_j.$$

よって

$$\begin{aligned} i(Ax)dV &= i(Ax)(dx_1 \wedge \cdots \wedge dx_n) = \sum_{i=1}^n (-1)^{i+1} dx_1 \wedge \cdots \wedge (i(Ax)dx_i) \wedge \cdots \wedge dx_n \\ &= \sum_{i=1}^n (-1)^{i+1} dx_1 \wedge \cdots \wedge \left(\sum_{j=1}^n a_{ij}x_j\right) \wedge \cdots \wedge dx_n \\ &= \sum_{i=1}^n (-1)^{i+1} \left(\sum_{j=1}^n a_{ij}x_j\right) dx_1 \wedge \cdots \wedge dx_{i-1} \wedge dx_{i+1} \wedge \cdots \wedge dx_n. \\ \therefore d(i(Ax)dV) &= \sum_{i=1}^n (-1)^{i+1} a_{ii} dx_i \wedge dx_1 \wedge \cdots \wedge dx_{i-1} \wedge dx_{i+1} \wedge \cdots \wedge dx_n \\ &= \sum_{i=1}^n a_{ii} dx_1 \wedge \cdots \wedge dx_n = (\text{tr } A)dV \end{aligned}$$

$x \in \partial D$  は  $|x| = 1$  を満たすから  $\partial D$  の外向き法線ベクトル場と同一視される。よって (i) と Stokes の定理より

$$\int_{\partial D} (Ax, x) d\sigma = \int_{\partial D} i(Ax)dV = \int_D d(i(Ax)dV) = (\text{tr } A)\omega_n$$

だから, 答えは  $\text{tr } A$ . □

---

<sup>1</sup> $\nu$  を外向き「単位」法線ベクトル場と考える。

## 平成 23 年度 (2010 年 8 月実施)

### 問 4

$n$  次対称群  $\mathfrak{S}_n$  の  $n$  次元トーラス  $T^n = \overbrace{S^1 \times \cdots \times S^1}^{n \text{ 個}}$  への作用を

$$\sigma(x_1, \dots, x_n) = (x_{\sigma(1)}, \dots, x_{\sigma(n)}) \quad (\sigma \in \mathfrak{S}_n, x_1, \dots, x_n \in S^1)$$

により定義する. このとき, 商空間  $X_n = T^n / \mathfrak{S}_n$  について考える.

- (i)  $X_2$  の整係数ホモロジー群  $H_*(X_2, \mathbb{Z})$  を求めよ.
- (ii)  $X_3$  の整係数ホモロジー群  $H_*(X_3, \mathbb{Z})$  を求めよ.

解答.

□

問 5

上半平面  $H = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2 \mid y > 0\}$  の各元  $(x, y)$  を行列

$$\begin{pmatrix} 1 & 0 \\ x & y \end{pmatrix}$$

に対応させると、行列の積と自然な  $C^\infty$  級多様体の構造によって  $H$  はリー群になる。単位元は  $(0, 1)$  である。このとき、次の各問に答えよ。

- (i)  $H$  上の右不変 1 次微分形式  $\omega_1, \omega_2$  が単位元においてそれぞれ  $dx, dy$  に等しいとする。このとき、 $\omega_i$  ( $i = 1, 2$ ) を  $dx, dy$  を用いて表せ。さらに、 $d\omega_i$  を  $\omega_1$  と  $\omega_2$  を用いて表わせ。(ただし、リー群  $G$  上の 1 次微分形式  $\omega$  が右不変であるとは、各  $g \in G$  に対して  $\varphi_g : G \rightarrow G$  を  $\varphi_g(h) = hg$  で定めるとき、 $\varphi_g^* \omega = \omega$  が成り立つこととして定義される。)
- (ii)  $\Gamma$  を  $H$  の部分群とし、商空間  $H/\Gamma$  が、次の条件 (\*) を満たす  $C^\infty$  級多様体の構造を持つと仮定する。

(\*) 射影  $\pi : H \rightarrow H/\Gamma$  は局所微分同相。(すなわち、各  $(x, y) \in H$  に対して、十分小さな開近傍  $U$  をとると、 $\pi$  の  $U$  への制限は  $U$  と  $\pi(U)$  の微分同相を与える。)

このとき、 $H/\Gamma$  上の 1 次微分形式  $\tilde{\omega}_i$  ( $i = 1, 2$ ) で  $\pi^* \tilde{\omega}_i = \omega_i$  を満たすものが存在することを示せ。

- (iii) (ii) の仮定の下では  $H/\Gamma$  はコンパクトになり得ないことを示せ。

解答. (i)  $\omega_i = \alpha_i dx + \beta_i dy$  とおく。  $g = \begin{pmatrix} 1 & \\ a & b \end{pmatrix}, h = \begin{pmatrix} 1 & \\ x & y \end{pmatrix} \in H$  に対し  $\varphi_g(h) = hg = \begin{pmatrix} 1 & \\ x+ay & by \end{pmatrix}$  だから

$$\begin{aligned} \varphi_g^* \omega_i &= \alpha_i(x+ay, by)(dx+ady) + \beta_i(x+ay, by)bdy \\ &= \alpha_i(x+ay, by)dx + (a\alpha_i(x+ay, by) + b\beta_i(x+ay, by))dy. \end{aligned}$$

よって任意の  $(a, b), (x, y) \in H$  に対し

$$\begin{cases} \alpha_i(x+ay, by) = \alpha_i(x, y) \\ a\alpha_i(x+ay, by) + b\beta_i(x+ay, by) = \beta_i(x, y) \end{cases} \quad \begin{cases} \alpha_1(0, 1) = 1, & \beta_1(0, 1) = 0 \\ \alpha_2(0, 1) = 0, & \beta_2(0, 1) = 1 \end{cases}$$

$(x, y) = (0, 1)$  とすると  $\alpha_1(x, y) = 1, \beta_1(x, y) = -\frac{x}{y}, \alpha_2(x, y) = 0, \beta_2(x, y) = \frac{1}{y}$  であることが必要。逆にこれらの  $\alpha_i, \beta_i$  は条件を満たすから

$$\omega_1 = dx - \frac{x}{y}dy, \quad \omega_2 = \frac{1}{y}dy.$$

この時  $d\omega_1 = -\frac{1}{y}dx \wedge dy = -\omega_1 \wedge \omega_2, d\omega_2 = 0$ 。

- (ii)  $\tilde{\omega}_1 = \tilde{\alpha}_1 dx + \tilde{\beta}_1 dy$  とおく。  $\pi : H \rightarrow H/\Gamma, \pi(x, y) = (\pi_1(x, y), \pi_2(x, y))$  を射影とすると

$$\begin{aligned} \pi^* \tilde{\omega}_i &= \tilde{\alpha}_i(\pi(x, y)) \left( \frac{\partial \pi_1}{\partial x} dx + \frac{\partial \pi_1}{\partial y} dy \right) + \tilde{\beta}_i(\pi(x, y)) \left( \frac{\partial \pi_2}{\partial x} dx + \frac{\partial \pi_2}{\partial y} dy \right) \\ &= \left( \tilde{\alpha}_i(\pi(x, y)) \frac{\partial \pi_1}{\partial x} + \tilde{\beta}_i(\pi(x, y)) \frac{\partial \pi_2}{\partial x} \right) dx + \left( \tilde{\alpha}_i(\pi(x, y)) \frac{\partial \pi_1}{\partial y} + \tilde{\beta}_i(\pi(x, y)) \frac{\partial \pi_2}{\partial y} \right) dy. \end{aligned}$$

これが  $\omega_i$  に等しいから

$$\begin{pmatrix} \frac{\partial \pi_1}{\partial x} & \frac{\partial \pi_2}{\partial x} \\ \frac{\partial \pi_1}{\partial y} & \frac{\partial \pi_2}{\partial y} \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \tilde{\alpha}_i(\pi(x, y)) \\ \tilde{\beta}_i(\pi(x, y)) \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \alpha_i \\ \beta_i \end{pmatrix}.$$

$\pi$  は局所微分同相だから、この左辺の 2 次正方行列は正則。よって  $\tilde{\alpha}_i(\pi(x, y)), \tilde{\beta}_i(\pi(x, y))$  は一意に定まる。  $\pi(x, y) = \pi(x', y')$  とすると  $(x', y') = (x, y) \cdot g = \varphi_g(x, y)$  となる  $g \in H$  が存在するから

$$(\pi^* \tilde{\omega}_i)_{(x', y')} = (\omega_i)_{(x', y')} = (\omega_i)_{\varphi_g(x, y)} = (\varphi_g^* \omega_i)_{(x, y)} = (\omega_i)_{(x, y)} = (\pi^* \tilde{\omega}_i)_{(x, y)}.$$

よって  $\tilde{\omega}_i$  は well-defined. これで示された。



(iii)  $\pi(x, y) = (x, y)$  となる任意の  $(x, y) \in H/\Gamma$  において

$$\widetilde{\omega}_1 \wedge \widetilde{\omega}_2 = \pi^*(\widetilde{\omega}_1 \wedge \widetilde{\omega}_2) = (\pi^*\widetilde{\omega}_1) \wedge (\pi^*\widetilde{\omega}_2) = \omega_1 \wedge \omega_2 = \frac{1}{y}dx \wedge dy$$

である。これは  $H/\Gamma$  で消えない 2 次微分形式だから、 $H/\Gamma$  は向き付け可能。今  $\partial(H/\Gamma) \neq \emptyset$  とする。 $\pi(x, y) \in \partial(H/\Gamma)$  となる  $(x, y) \in H$  を取る。  $H$  は境界を持たないから、 $(x, y)$  を中心とする開円板  $U \subset H$  が取れる。この時 (ii) より  $U \setminus (x, y)$  と  $\pi(U) \setminus \pi(x, y)$  は同相。しかし  $\pi(x, y) \in \partial(H/\Gamma)$  より  $U \setminus (x, y) \simeq S^1 \not\simeq \pi(U) \setminus \pi(x, y)$  だから矛盾。よって  $\partial(H/\Gamma) = \emptyset$ 。  $H/\Gamma$  がコンパクトであったとすると、(i) の結果と Stokes の定理より

$$\int_{H/\Gamma} \widetilde{\omega}_1 \wedge \widetilde{\omega}_2 = \int_{H/\Gamma} (-d\widetilde{\omega}_1) = - \int_{\partial(H/\Gamma)} \widetilde{\omega}_1 = 0.$$

一方  $H$  は上半平面であるから

$$\int_{H/\Gamma} \widetilde{\omega}_1 \wedge \widetilde{\omega}_2 = \int_{H/\Gamma} \frac{1}{y}dx \wedge dy > 0$$

となり矛盾。

□

## 平成 22 年度 (2009 年 8 月実施)

### 問 4

- (i)  $X = \{x \in \mathbb{R}^3 \mid |x| \geq 1\}$  の商空間  $X/\sim$  の整係数ホモロジー群  $H_*(X/\sim, \mathbb{Z})$  を求めよ. ただし,  $\sim$  は  $X$  の境界  $\partial X$  において

$$x \sim -x \quad (x \in \partial X)$$

で定まる同値関係である.

- (ii)  $Y = \{x \in \mathbb{R}^3 \mid 1 \leq |x| \leq 2\}$  の商空間  $Y/\approx$  の整係数ホモロジー群  $H_*(Y/\approx, \mathbb{Z})$  を求めよ. ただし,  $\approx$  は  $Y$  の境界  $\partial Y$  において

$$y \approx -y \quad (y \in \partial Y)$$

で定まる同値関係である.

解答.

□

## 問 5

二つの二次元ユークリッド空間

$$U_1 = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2\}, \quad U_2 = \{(x', y') \in \mathbb{R}^2\}$$

を考え, その disjoint union  $U_1 \sqcup U_2$  の商空間を  $M = U_1 \sqcup U_2 / \sim$  とする. ただし,  $\sim$  は  $(x, y) \in U_1, x \neq 0$  と  $(x', y') \in U_2, x' \neq 0$  が

$$x' = \frac{1}{x}, \quad y' = xy$$

をみたすときに

$$(x, y) \sim (x', y')$$

として定まる同値関係である.

(i)  $M$  がハウスドルフ空間であることを示せ.

(ii)  $M$  に  $C^\infty$  級多様体の構造を一つ与えよ. 以下  $M$  はその構造により  $C^\infty$  級多様体とする.

(iii)  $U_1$  上の  $C^\infty$  級関数  $f: U_1 \rightarrow \mathbb{R}^2$  を

$$f(x, y) = (y, xy)$$

によって定めたとき,  $M$  上の  $C^\infty$  級写像  $\tilde{f}: M \rightarrow \mathbb{R}^2$  に拡張されるかどうかを調べよ. 拡張される場合はその臨界点を全て求めよ.

(iv)  $m, n$  を 0 以上の整数とすると  $U_1$  上の  $C^\infty$  級ベクトル場

$$x^m \frac{\partial}{\partial x} + y^n \frac{\partial}{\partial y}$$

が  $M$  上の  $C^\infty$  級ベクトル場に拡張されるための  $m, n$  に関する必要十分条件を求めよ.

解答.  $U_i$  の座標を  $(x, y)_i$  と書く.

(i) 異なる  $p, q \in M$  を取る.  $p, q \in U_1$  または  $p, q \in U_2$  なら  $\mathbb{R}^2$  の Hausdorff 性から良い.  $p \in U_1, q \in U_2$  の時,  $p = (x, y)_1, q = (x', y')_2$  とする.  $xx' \neq 0$  なら  $q = (x^{-1}, xy)_1 \neq p$  だから  $U_1 = \mathbb{R}^2$  の Hausdorff 性から良い.  $x = 0$  なら  $p \notin U_2$  だから良い.  $x' = 0$  の時も同様. これで示せた.

(ii)  $U_1 \cup U_2 = M$  である.  $\varphi_i: U_i \rightarrow \mathbb{R}^2$  ( $i = 1, 2$ ) を  $\varphi_i((x, y)_i) = (x, y)$  で定める. これらは同相写像である.  $(x, y) \in \varphi_1(U_1 \cap U_2) = \{(x, y) \in \mathbb{R}^2; x \neq 0\}$  に対し

$$\varphi_2 \circ \varphi_1^{-1}(x, y) = \varphi_2((x, y)_1) = \varphi_2((x^{-1}, xy)_2) = (x^{-1}, xy)$$

だから  $\varphi_2 \circ \varphi_1^{-1}: \varphi_1(U_1 \cap U_2) \rightarrow \varphi_2(U_1 \cap U_2)$  は  $C^\infty$  級写像.  $\varphi_1 \circ \varphi_2^{-1}$  も同様だから,  $\{(U_i, \varphi_i)\}_{i=1,2}$  が  $M$  の座標近傍系を与える.

(iii)  $U_1 \cap U_2$  上では

$$f((x, y)_2) = f((x^{-1}, xy)_1) = (xy, y).$$

これは  $x = 0$  まで込めて  $C^\infty$  だから,  $f$  は  $C^\infty$  級写像  $\tilde{f}: M \rightarrow \mathbb{R}^2$  に拡張できる.  $U_1$  上では  $D\tilde{f} = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ y & x \end{pmatrix}$  だから  $\det D\tilde{f} = -y$ . よって臨界点は  $\{(x, 0)_1; x \in \mathbb{R}\}$ .  $U_2$  上では  $D\tilde{f} = \begin{pmatrix} y & x \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$  だから  $\det D\tilde{f} = y$ . よって臨界点は  $\{(x, 0)_2; x \in \mathbb{R}\}$ . 以上から  $\tilde{f}$  の臨界点は  $\{(x, 0)_1; x \in \mathbb{R}\} \cup \{(x, 0)_2; x \in \mathbb{R}\}$ .

(iv)  $U_2$  の座標を  $(z, w)$  と書くと,  $U_1 \cap U_2$  上では  $z = x^{-1}, w = xy$  だから  $x = z^{-1}, y = zw$ . よって

$$\begin{aligned} x^m \frac{\partial}{\partial x} + y^n \frac{\partial}{\partial y} &= z^{-m} \left( -x^{-2} \frac{\partial}{\partial z} + y \frac{\partial}{\partial w} \right) + z^n w^n x \frac{\partial}{\partial w} \\ &= -z^{2-m} \frac{\partial}{\partial z} + (z^{1-m} w + z^{n-1} w^n) \frac{\partial}{\partial w}. \end{aligned}$$

よって  $z^{2-m}$  が  $C^\infty$  であることから  $m \leq 2$  が必要.  $m = 2$  の時  $z^{1-m} w + z^{n-1} w^n = z^{-1} w + z^{n-1} w^n$  は  $z = 0$  で  $C^\infty$  でない.  $m \leq 1$  の時  $z^{1-m} w$  は  $C^\infty$  だから,  $z^{n-1} w^n$  が  $C^\infty$  であればよく  $n \geq 1$ . よって必要十分条件は  $m \leq 1 \leq n$ . □

## 平成 21 年度 (2008 年 8 月実施)

### 問 3

複素  $n$  次正方行列全体の集合  $M_n(\mathbb{C})$  を自然に  $\mathbb{C}^{n^2}$  と同一視し, 位相空間とみなす.  $I \in M_n(\mathbb{C})$  を単位行列とする. 整数  $d \geq 1$  に対し,

$$\mathcal{S}_d = \{A \in M_n(\mathbb{C}) \mid A^d = I\},$$

$$\mathcal{S}_d^* = \mathcal{S}_d \setminus \left( \bigcup_{k=1}^{d-1} \mathcal{S}_k \right)$$

と定義する. このとき,  $\mathcal{S}_d^*$  は  $M_n(\mathbb{C})$  の閉集合であることを示せ.

解答.  $A \in \mathcal{S}_d$  の固有値  $\lambda$  は  $\lambda^d = 1$  を満たすから  $\lambda = \zeta^j$  ( $0 \leq j \leq d-1$ ). ただし  $\zeta = e^{2\pi i/d}$ .  $A$  の最小多項式は  $x^d - 1$  を割り切るが,  $x^d - 1$  は重根を持たないから  $A$  の最小多項式もそう. よって  $A$  は対角化可能だから,  $g \in GL_n(\mathbb{C})$  があって  $A = g^{-1} \text{diag}(\zeta^{j_1}, \dots, \zeta^{j_n})g$  と書ける. よって

$$\mathcal{S}_d = \{g^{-1} \text{diag}(\zeta^{j_1}, \dots, \zeta^{j_n})g; g \in GL_n(\mathbb{C}), 0 \leq j_i \leq d-1\}.$$

ここで

$$A \in \mathcal{S}_k \iff g^{-1} \text{diag}(\zeta^{j_{1k}}, \dots, \zeta^{j_{nk}})g = I \iff \text{diag}(\zeta^{j_{1k}}, \dots, \zeta^{j_{nk}}) = I \iff d \mid j_{1k}, \dots, d \mid j_{nk}$$

だから

$$\mathcal{S}_k = \bigcup_{\substack{(j_1, \dots, j_n) \in [0, d-1]^n \\ d \mid j_{1k}, \dots, d \mid j_{nk}}} \{g^{-1} \text{diag}(\zeta^{j_1}, \dots, \zeta^{j_n})g; g \in GL_n(\mathbb{C})\}.$$

よって

$$\mathcal{S}_d^* = \bigcup \mathcal{S}_d^*(j_1, \dots, j_n), \quad \mathcal{S}_d^*(j_1, \dots, j_n) := \{g^{-1} \text{diag}(\zeta^{j_1}, \dots, \zeta^{j_n})g; g \in GL_n(\mathbb{C})\}.$$

ここで  $\bigcup$  は  $(j_1, \dots, j_n) \in [0, d-1]^n$  のうち, 任意の  $1 \leq k \leq d-1$  に対し  $i$  があって  $d \nmid j_{ik}$  となるような組全体をわたる. そのような組の個数は  $d^n$  以下だから, 特に有限. よって  $\mathcal{S}_d^*(j_1, \dots, j_n)$  が閉集合であることを示せば良い.  $\mathcal{S}_d^*(j_1, \dots, j_n) = \emptyset$  なら閉だから良い. 空でないとする.  $\mathcal{S}_d^*(j_1, \dots, j_n)$  の点列  $\{A_m\}$  を任意に取り  $A_m \rightarrow A$  とする.  $A_m^d = I$  だから  $m \rightarrow \infty$  として  $A^d = I$ . よって  $A \in \mathcal{S}_d$  だから  $A$  は対角化可能.  $A_m$  は  $g_m \in GL_n(\mathbb{C})$  があって  $A_m = g_m^{-1} \text{diag}(\zeta^{j_1}, \dots, \zeta^{j_n})g_m$  と書けるから  $\det(A_m - \lambda I) = (\lambda - \zeta^{j_1}) \dots (\lambda - \zeta^{j_n})$ .  $m \rightarrow \infty$  とすると左辺  $\rightarrow \det(A - \lambda I)$  だから  $A$  の固有値は  $\zeta^{j_1}, \dots, \zeta^{j_n}$ . よって  $g \in GL_n(\mathbb{C})$  があって  $A = g^{-1} \text{diag}(\zeta^{j_1}, \dots, \zeta^{j_n})g$  と書ける.  $(j_1, \dots, j_n)$  の取り方から  $A \in \mathcal{S}_d^*(j_1, \dots, j_n)$  なので,  $\mathcal{S}_d^*(j_1, \dots, j_n)$  は閉集合.  $\square$

#### 問 4

$\mathbb{C}^2$  の部分集合

$$P_1 = \{(z, w) \in \mathbb{C}^2 \mid z = 0\},$$

$$P_2 = \{(z, w) \in \mathbb{C}^2 \mid w = 0\},$$

$$Q_\lambda = \{(z, w) \in \mathbb{C}^2 \mid z = w + \lambda\}$$

を考える。ただし、 $\lambda$  は複素数とする。

(i) ホモロジー群  $H_*(\mathbb{C}^2 \setminus (P_1 \cup P_2); \mathbb{Z})$  を求めよ。

(ii) ホモロジー群  $H_*(\mathbb{C}^2 \setminus (P_1 \cup P_2 \cup Q_\lambda); \mathbb{Z})$  を求めよ。

解答.

□

## 平成 20 年度 (2007 年 8 月実施)

### 問 4

$\mathbb{R}^3$  の部分空間  $X$  を

$$X = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 \mid (\sqrt{x^2 + y^2} - 2)^2 + z^2 \leq 1\}$$

により定め, 商空間  $W = X/\sim$  を考える. ただし,  $\sim$  は,  $X$  の境界  $\partial X$  において,

$$(x, y, z) \sim (-x, -y, -z), \quad (x, y, z) \in \partial X$$

で定まる同値関係である. このとき次の問に答えよ.

- (i) ホモロジー群  $H_n(W; \mathbb{Z})$  ( $n = 0, 1, 2, 3$ ) を求めよ.
- (ii) コホモロジー群  $H^n(W; \mathbb{Z}/2\mathbb{Z})$  ( $n = 0, 1, 2, 3$ ) を求めよ.

解答.

□

## 平成 19 年度 (2006 年 8 月実施)

### 問 4

区間  $[-1, 1]$  を  $I$  とおく. 位相空間  $U, V$  を

$$U = \left\{ (x, y, z) \in I \times I \times I \mid x^2 + y^2 \geq \frac{1}{4} \right\},$$
$$V = \left\{ (x, y, z) \in I \times I \times I \mid x^2 + y^2 = \frac{1}{4} \right\}$$

により定める.  $U$  の同値関係  $\sim$  を次で定義する.

$$(-1, y, z) \sim (1, y, z), \quad y, z \in I,$$

$$(x, -1, z) \sim (x, 1, z), \quad x, z \in I,$$

$$(x, y, -1) \sim (-y, x, 1), \quad x, y \in I, x^2 + y^2 \geq \frac{1}{4}.$$

$X = U/\sim$  を  $U$  の  $\sim$  による商空間とし,  $Y$  を  $U$  から  $X$  への射影による  $V$  の像とする.

(i) ホモロジー群  $H_n(X; \mathbb{Z})$ ,  $n = 0, 1, 2, 3$ , を求めよ.

(ii) ホモロジー群  $H_n(X, Y; \mathbb{Z})$ ,  $n = 0, 1, 2, 3$ , を求めよ.

解答.

□

## 平成 18 年度 (2005 年 8 月実施)

### 問 3

$\tau$  を虚部が正の複素数とする ( $\operatorname{Im} \tau > 0$ ).  $e(x) = \exp(2\pi\sqrt{-1}x)$ ,  $\mathbb{C}^\times = \mathbb{C} \setminus \{0\}$  とおき, 写像  $f: \mathbb{C} \rightarrow \mathbb{C}^\times \times \mathbb{C}^\times$  を  $f(x) = (e(x), e(\tau x))$  で定義する.

- (i)  $\mathbb{C}^\times \times \mathbb{C}^\times$  をその部分群  $f(\mathbb{C})$  で割って得られる剰余群は, 基本周期  $(\tau, 1)$  を持つ 1 次元複素トーラス  $E_\tau = \mathbb{C}/(\mathbb{Z} + \mathbb{Z}\tau)$  に同型であることを示せ.
- (ii) 次の 2 条件 (a), (b) を満たす複素多様体  $X$  と正則写像  $\pi: X \rightarrow E_\tau$  を与えよ.
  - (a)  $\mathbb{C}^\times \times \mathbb{C}^\times$  は  $X$  の開部分集合と同型,
  - (b)  $E_\tau$  の任意の点  $p$  に対して,  $\pi^{-1}(p)$  は 1 次元複素射影空間  $\mathbb{P}^1$  と同型.

解答. (i) 写像  $\varphi: \mathbb{C} \rightarrow (\mathbb{C}^\times \times \mathbb{C}^\times)/f(\mathbb{C})$  を  $\varphi(z) = [(1, e(z))]$  で定める. ただし  $[]$  で  $(\mathbb{C}^\times \times \mathbb{C}^\times)/f(\mathbb{C})$  における同値類を表す. これが全射準同型になることを示す.

$$\varphi(x + x') = [(1, e(x + x'))] = [(1, e(x))(1, e(x'))] = [(1, e(x))][(1, e(x'))] = \varphi(x)\varphi(x')$$

より  $\varphi$  は準同型. 任意の  $re^{i\theta} \in \mathbb{C}^\times$  に対し  $e(\frac{1}{2\pi}(\theta - i \log r)) = re^{i\theta}$  だから, 任意の  $(w, w') \in \mathbb{C}^\times \times \mathbb{C}^\times$  に対し  $(w, w') = (e(z), e(z'))$  となる  $(z, z') \in \mathbb{C} \times \mathbb{C}$  が存在する. この時

$$\varphi(z' - \tau z) = [(1, e(z' - \tau z))] = [(e(z), e(\tau z))(1, e(z' - \tau z))] = [(e(z), e(z'))] = [(w, w')]$$

だから  $\varphi$  は全射. これで示せた. 今  $x \in \operatorname{Ker} \varphi$  とすると  $[(1, e(x))] = [(1, 1)]$  だから,  $x' \in \mathbb{C}$  があって  $(1, e(x)) = (1, 1)f(x') = (e(x'), e(\tau x'))$ . よって  $x' \in \mathbb{Z}$  であり,  $1 = e(x)e(\tau x')^{-1} = e(x - \tau x')$  から  $x - \tau x' \in \mathbb{Z}$ . 従って  $\operatorname{Ker} \varphi \subset \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\tau$ . 逆に  $x = n + \tau m \in \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\tau$  なら

$$\varphi(x) = [(1, e(n + \tau m))] = [(e(-m), e(n))(e(m), e(\tau n))] = [(1, 1)f(m)] = [(1, 1)]$$

だから  $x \in \operatorname{Ker} \varphi$ . よって  $\operatorname{Ker} \varphi = \mathbb{Z} + \mathbb{Z}\tau$  なので

$$\mathbb{C}/(\mathbb{Z} + \mathbb{Z}\tau) = \mathbb{C}/\operatorname{Ker} \varphi \simeq \operatorname{Im} \varphi = (\mathbb{C}^\times \times \mathbb{C}^\times)/f(\mathbb{C}).$$

(ii)

□

(補足) これは Calabi–Eckmann manifold というものが元ネタらしい.



#### 問 4

自然数  $n$  に対して,  $S^n = \{x \in \mathbb{R}^{n+1} \mid |x| = 1\}$  ( $n$  次元球面) とおく. 写像  $f: S^n \times S^n \rightarrow S^n \times S^n$  を

$$f(x, y) = (-y, x) \quad (x, y \in S^n)$$

で定義する.  $f(x, y) \sim (x, y)$  で生成される  $S^n \times S^n$  の同値関係を  $\sim$  として,  $X_n$  で商空間  $(S^n \times S^n)/\sim$  を表す.

- (i)  $X_n$  は  $2n$  次元可微分多様体の構造を持ち, 向き付け不可能であることを示せ.
- (ii)  $X_1$  のホモロジー群  $H_k(X_1; \mathbb{Z})$  ( $k = 0, 1, 2$ ) を求めよ.
- (iii)  $n \geq 2$  のとき,  $X_n$  のホモロジー群  $H_k(X_n; \mathbb{Z})$  ( $k = 0, 1, \dots, n-1$ ) を求めよ.

解答.

□

# 平成 17 年度 (2004 年 8 月実施)

## 問 4

写像  $f: \mathbb{R}^3 \rightarrow M(2, \mathbb{C})$  を

$$f(x, y, z) = \exp \begin{pmatrix} iz & x + iy \\ -x + iy & -iz \end{pmatrix}$$

によって定める.

- (i)  $f$  の像は 3 次元球面  $S^3$  と同相であることを示せ.  
 (ii)  $f$  が点  $(x, y, z)$  で正則となるための必要十分条件は

$$\frac{x^2 + y^2 + z^2}{\pi^2} \notin \{1^2, 2^2, 3^2, \dots\}$$

であることを示せ.

解答. (i)  $f(x, y, z) = \exp A, r = \sqrt{x^2 + y^2 + z^2}$  とする.  $r = 0$  の時は  $f(0, 0, 0) = \exp 0 = I$ . 以下  $r \neq 0$  とする.  $A^2 = (\operatorname{tr} A)A - (\det A)I = -r^2 I = (ir)^2 I$  だから

$$\begin{aligned} f(x, y, z) &= \sum_{n \geq 0} \frac{A^{2n}}{(2n)!} + \sum_{n \geq 0} \frac{A^{2n+1}}{(2n+1)!} = \sum_{n \geq 0} \frac{(ir)^{2n}}{(2n)!} I + \frac{1}{ir} \sum_{n \geq 0} \frac{(ir)^{2n+1}}{(2n+1)!} A \\ &= \cosh(ir)I + \frac{1}{ir} \sinh(ir)A = (\cos r)I + \frac{\sin r}{r} A \\ &= \begin{pmatrix} \cos r + ig(r)z & g(r)(x + iy) \\ g(r)(-x + iy) & \cos r - ig(r)z \end{pmatrix} \in \left\{ \begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ -\bar{\beta} & \bar{\alpha} \end{pmatrix} \in M_2(\mathbb{C}); |\alpha|^2 + |\beta|^2 = 1 \right\}. \quad (*) \end{aligned}$$

ここで  $g(r) = (\sin r)/r$  とおいた. また包含は  $\det f(x, y, z) = \exp(\operatorname{tr} A) = \exp(0) = 1$  による.  $g(0) = \lim_{r \rightarrow 0} g(r) = 1$  と見なせばこれは  $r = 0$  でも成立する.

逆に任意の  $\begin{pmatrix} \alpha & \beta \\ -\bar{\beta} & \bar{\alpha} \end{pmatrix} \in SU(2)$  が  $f$  の像に入ることを示す.  $\operatorname{Re} \alpha = 1$  の時  $\alpha = 1, \beta = 0$ .  $f(0, 0, 0) = I$  だからよい.  $\operatorname{Re} \alpha = -1$  の時  $\alpha = -1, \beta = 0$ .  $f(\pi, 0, 0) = -I$  だからよい.  $-1 < \operatorname{Re} \alpha < 1$  の時  $\alpha = a + ib, \beta = c + id$  ( $a, b, c, d \in \mathbb{R}$ ) とおくと

$$a = \cos r, \quad b = g(r)z, \quad c = g(r)x, \quad d = g(r)y$$

となる  $(x, y, z) \in \mathbb{R}^3$  の存在を言えばよい.  $r = \arccos a \in (0, \pi)$  だから  $\sin r = \sin(\arccos a) = \sqrt{1 - a^2} (\neq 0)$ . よって  $(x, y, z) = \frac{\arccos a}{\sqrt{1 - a^2}}(c, d, b)$  となり確かに存在する. これで示せた.

(\*) の右辺は  $\{(\alpha, \beta) \in \mathbb{C}^2; |\alpha|^2 + |\beta|^2 = 1\} = S^3$  に同相であるから示された.

(ii)  $E_1 = \begin{pmatrix} 1 & \\ & 1 \end{pmatrix}, E_2 = \begin{pmatrix} i & \\ & -i \end{pmatrix}, E_3 = \begin{pmatrix} & 1 \\ -1 & \end{pmatrix}, E_4 = \begin{pmatrix} & i \\ i & \end{pmatrix}$  は  $M_2(\mathbb{C})$  の基底であり,

$$f(x, y, z) = (\cos r)E_1 + g(r)(zE_2 + xE_3 + yE_4)$$

だから  $f$  を  $f: \mathbb{R}^3 \rightarrow \mathbb{R}^4$  と見なせる.  $r \neq 0$  の時

$$\begin{aligned} Df_{(x,y,z)} &= \begin{pmatrix} -xg(r) & -yg(r) & -zg(r) \\ g'(r)\frac{xz}{r} & g'(r)\frac{yz}{r} & g'(r)\frac{z^2}{r} + g(r) \\ g'(r)\frac{x^2}{r} + g(r) & g'(r)\frac{xy}{r} & g'(r)\frac{xz}{r} \\ g'(r)\frac{xy}{r} & g'(r)\frac{y^2}{r} + g(r) & g'(r)\frac{yz}{r} \end{pmatrix} \\ &\rightarrow \begin{pmatrix} xrg'(r) & yrg'(r) & zrg'(r) \\ g'(r)\frac{xz}{r} & g'(r)\frac{yz}{r} & g'(r)\frac{z^2}{r} + g(r) \\ g'(r)\frac{x^2}{r} + g(r) & g'(r)\frac{xy}{r} & g'(r)\frac{xz}{r} \\ g'(r)\frac{xy}{r} & g'(r)\frac{y^2}{r} + g(r) & g'(r)\frac{yz}{r} \end{pmatrix} \rightarrow \begin{pmatrix} xrg'(r) & yrg'(r) & zrg'(r) \\ 0 & 0 & g(r) \\ g(r) & 0 & 0 \\ 0 & g(r) & 0 \end{pmatrix}. \end{aligned}$$

これより  $\text{rank } Df_{(x,y,z)} = 3$  となるのは  $g(r) \neq 0$ , すなわち  $r/\pi \notin \{1, 2, 3, \dots\}$  の時.  $r = 0$  の時は

$$g(r) = 1 - \frac{r^2}{6} + O(r^4), \quad \frac{1}{r}g'(r) = -\frac{1}{3} + O(r^2)$$

より

$$Df_{(0,0,0)} = \begin{pmatrix} 0 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

だから  $\text{rank } Df_{(0,0,0)} = 3$ . 以上で示された.

□

## 問 5

位相空間  $U, V, W$  を

$$U = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 : x^2 + y^2 \leq 1, z^2 \leq 1\},$$

$$V = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 : x^2 + y^2 \leq 1, z^2 = 1\} (\subset U),$$

$$W = \{(x, y, z) \in \mathbb{R}^3 : x^2 + y^2 = 1, z^2 \leq 1\} (\subset U)$$

で定める.  $W$  の各点  $(x, y, z)$  を  $(-x, -y, -z)$  と同一視することにより,  $U$  から得られる位相空間を  $X$  とおく. また,  $U$  から  $X$  への射影による  $V$  の像を  $Y$  とおく.

- (i) 境界付き多様体の構造が  $X$  に入ることを示せ.
- (ii) ホモロジー群  $H_*(X; \mathbb{Z})$  を求めよ.
- (iii) ホモロジー群  $H_*(X, Y; \mathbb{Z})$  を求めよ.

解答.

□

# 平成 16 年度 (2003 年 8 月実施)

## 問 4

$n$  次複素正方行列の全体  $M_n(\mathbb{C})$  の部分集合  $S$  を

$$S = \{A \in M_n(\mathbb{C}) \mid A^2 = I\}$$

で定める. ただし,  $I$  は  $n$  次単位行列を表す. このとき,  $S$  の連結成分の個数を求めよ. また, 各連結成分は  $M_n(\mathbb{C})$  の部分可微分多様体になることを示し, その次元を求めよ.

解答.  $A \in S$  の固有値  $\lambda$  は  $\lambda^2 = 1$  を満たすから  $\lambda = \pm 1$ .  $A$  の最小多項式は  $x^2 - 1$  を割り切るが, これは重根を持たないから  $A$  は対角化可能. よって  $g \in GL_n(\mathbb{C})$  があって  $g^{-1}Ag = D_k := \text{diag}(I_k, -I_{n-k})$  と書ける. 逆に  $g \in GL_n(\mathbb{C})$  に対し  $gD_kg^{-1} \in S$  だから

$$S = \bigcup_{0 \leq k \leq n} S_k, \quad S_k := \{gD_kg^{-1}; g \in GL_n(\mathbb{C})\}.$$

• 連続写像  $\text{tr} : M_n(\mathbb{C}) \rightarrow \mathbb{C}$  による  $S_k$  の像は  $k - (n - k) = 2k - n$  だから,  $k \neq k'$  なら  $S_k$  と  $S_{k'}$  は異なる連結成分である. ここで  $GL_n(\mathbb{C})$  が連結であることを示す.  $g \in GL_n(\mathbb{C})$  を任意に取る.  $g$  の Jordan 標準形を  $PgP^{-1} = J$  とし,  $g$  の固有値を  $\lambda_1, \dots, \lambda_n$  とする.  $\lambda_j$  と 1 を結ぶ  $\mathbb{C}^\times$  上の曲線  $\gamma_j(t) : [0, 1] \rightarrow \mathbb{C}^\times$  を取る.  $J$  の対角成分  $\lambda_j$  を  $\gamma_j(t)$  で, 非対角成分の 1 を (あれば)  $1 - t$  で置き換えた行列を  $J(t)$  とし,  $H(t) = P^{-1}J(t)P$  とおく. これは  $t$  について連続であり,  $\gamma$  の取り方から  $H(t) \in GL_n(\mathbb{C})$ ,  $H(0) = g$ ,  $H(1) = I$ . よって  $GL_n(\mathbb{C})$  は弧状連結, 特に連結である.  $S_k$  は  $GL_n(\mathbb{C})$  上の連続写像  $g \mapsto gD_kg^{-1}$  による  $GL_n(\mathbb{C})$  の像だから  $S_k$  も連結. 以上から  $S$  の連結成分は  $S_0, S_1, \dots, S_n$  の  $n + 1$  個.

•  $S_k$  には Lie 群  $GL_n(\mathbb{C})$  が  $g \cdot X = gXg^{-1}$  ( $g \in GL_n(\mathbb{C})$ ,  $X \in S_k$ ) で作用する. この時任意の  $g_1D_kg_1^{-1}, g_2D_kg_2^{-1} \in S_k$  に対し  $g_2g_1^{-1}(g_1D_kg_1^{-1})(g_2g_1^{-1})^{-1} = g_2D_kg_2^{-1}$  だから, この作用は推移的である. また

$$G_k = \{g \in GL_n(\mathbb{C}); g \cdot D_k = D_k\} = \{g \in GL_n(\mathbb{C}); gD_kg^{-1} = D_k\}$$

は連続写像  $GL_n(\mathbb{C}) \rightarrow S_k, g \mapsto gD_kg^{-1}$  による  $D_k$  の逆像だから閉集合. 従って  $S_k$  は可微分多様体となる.<sup>2</sup> 今  $g = \begin{pmatrix} g_{11} & g_{12} \\ g_{21} & g_{22} \end{pmatrix} \in G_k$  ( $g_{11} \in M_k(\mathbb{C})$ ) とおくと

$$\begin{pmatrix} g_{11} & -g_{12} \\ g_{21} & -g_{22} \end{pmatrix} = gD_k = D_kg = \begin{pmatrix} g_{11} & g_{12} \\ -g_{21} & -g_{22} \end{pmatrix}$$

より  $g_{12} = g_{21} = 0$ . よって

$$G_k = \{\text{diag}(g_1, g_2); g_1 \in GL_k(\mathbb{C}), g_2 \in GL_{n-k}(\mathbb{C})\}$$

であるから,

$$\dim S_k = \dim GL_n(\mathbb{C}) - \dim G_k = 2n^2 - (2k^2 + 2(n-k)^2) = 4k(n-k).$$

□

<sup>2</sup>この事実は J. M. Lee, Introduction to Smooth Manifolds (Second edition), Springer の Theorem 21.20 による.

### 問 5

$A = \begin{pmatrix} a & b \\ c & d \end{pmatrix}$  は整数を成分とする 2 次正方行列で, その行列式は 1 に等しい.  $\mathbb{R}^3$  のアフィン変換  $f, g, h_A$  を

$$f(x, y, z) = (x + 1, y, z)$$

$$g(x, y, z) = (x, y + 1, z) \quad (x, y, z \in \mathbb{R})$$

$$h_A(x, y, z) = (ax + by, cx + dy, z + 1)$$

により定義する.  $\mathbb{R}^3$  のアフィン変換群の部分群で,  $f, g, h_A$  によって生成されるものを  $G_A$  で表し,  $X_A = \mathbb{R}^3/G_A$  をその作用による商空間とする.  $X_A$  の 1 次元ベッチ数が互いに異なるような  $A$  の例を 3 つ挙げ, それらの  $A$  のそれぞれについて整係数ホモロジー群  $H_*(X_A; \mathbb{Z})$  を求めよ.

解答.

□

## 平成 15 年度 (2002 年 8 月実施)

### 問 3

2 次元球面  $S^2$  にリー群の構造を入れることができるか？ また、その証明を述べよ。

解答. 入れることは出来ない.  $S^2$  がリー群であったとして単位元を  $e$  とおく. 0 でない  $v \in T_e(S^2)$  を任意に取る.  $g \in S^2$  に対し左移動  $L_g : S^2 \rightarrow S^2, x \mapsto gx$  は微分同相だから, 特異点を持たない  $S^2$  上の  $C^\infty$  級接ベクトル場  $X$  が得られる. 今  $T_x S^2$  を  $\mathbb{R}^2$  とみなし,  $v : S^2 \rightarrow S^2$  を  $v(x) = X_x/|X_x|$  で定める. さらに連続写像  $F : [0, 1] \times S^2 \rightarrow \mathbb{R}^3$  を

$$F(t, x) = (\cos \pi t)x + (\sin \pi t)v(x)$$

で定める.  $x \perp v(x)$  だから  $|F(t, x)|^2 = 1$ , すなわち  $F(t, x) \in S^2$  である. また  $F(0, x) = x, F(1, x) = -x$  だから  $F$  は  $\text{id}_{S^2}$  と  $a(x) = -x$  の間のホモトピーを与える. よって写像度について

$$1 = \deg(\text{id}_{S^2}) = \deg(a) = (-1)^3 = -1$$

となり矛盾.

(別解)  $X$  を構成した後, Poincaré-Hopf の定理を使えば一発. あるいは Gauss-Bonnet の定理を使って矛盾を示す事もできるらしい.<sup>3</sup> □

---

<sup>3</sup>小林, 曲線と曲面の微分幾何, 裳華房, P146, 問 3.3

# 平成 13 年度 (2000 年 8 月実施)

## 問 4

図の様に頂点  $A, B, C, D, A', B', C', D'$  を持つ正立方体を考える. その (下面を除く) 5 つの面,  $ABCD$  (上面),  $AA'B'B$  (左面),  $BB'C'C$  (正面),  $CC'D'D$  (右面),  $ADD'A'$  (後面) の中点をそれぞれ  $a, b, c, d, e$  と名付ける. 立方体の外接球を  $K$  とし, 3 つの線分  $\overline{ea}, \overline{bc}, \overline{dc}$  をそれぞれ ( $a$  および  $c$  方向に) 延長して  $K$  と交わる点をそれぞれ  $P, Q, R$  とおく.

(i) 5 点  $P, Q, R, B, C$  は平面正 5 角形の頂点となることを示せ.

(ii) 立方体の対頂点を結ぶ 4 本の対角線を軸に  $2\pi/3$  回転する 4 つの変換で生成される群を  $\Gamma$  とする.  $\Gamma$  で上記の正 5 角形を運動させてできる図形は何か? また, 群  $\Gamma$  の位数を求めよ.

解答. (i)  $A(-1, -1, 1), B(1, -1, 1), C(1, 1, 1), D(-1, 1, 1)$  とし,  $A', B', C', D'$  が  $z = -1$  上にあるように座標を取る. この時  $a(0, 0, 1), b(0, -1, 0), c(1, 0, 0), d(0, 1, 0), e(-1, 0, 0), K = \{x^2 + y^2 + z^2 = 3\}$  である.  $\lambda = \frac{1+\sqrt{5}}{2}$  とおく.  $\lambda^2 - \lambda - 1 = 0$  であることに注意する.  $\overline{ea} = {}^t(-1, 0, 0) + s {}^t(1, 0, 1) (s \geq 0)$  と  $K$  の交点は  $(-1+s)^2 + s^2 = 3$  より  $s = \lambda$  だから  $P(\lambda-1, 0, \lambda)$ .  $\overline{bc} = {}^t(0, -1, 0) + s {}^t(1, 1, 0) (s \geq 0)$  と  $K$  の交点は  $(-1+s)^2 + s^2 = 3$  より  $s = \lambda$  だから  $Q(\lambda, \lambda-1, 0)$ . 対称性より  $R(\lambda, -\lambda+1, 0)$ . ここで  $\pi: (\lambda-1)x + (2-\lambda)z = 1$  とおくと,  $(\lambda-1) \cdot 1 + (2-\lambda) \cdot 1 = 1, (\lambda-1)^2 + (2-\lambda)\lambda = 1, (\lambda-1)\lambda = 1$  より  $B, C, P, Q, R$  は  $\pi$  上にあることがわかる. 次に  $\pi$  上の点  $X$  があって,  $XB = XC = XP = XQ = XR$  となることを示す. 対称性から  $X(\alpha, 0, \beta)$  と書ける.  $X$  は  $\pi$  上にあるから  $(\lambda-1)\alpha + (2-\lambda)\beta = 1$ .

$$XB = XP \iff (\alpha-1)^2 + 1 + (\beta-1)^2 = (\alpha - (\lambda-1))^2 + (\beta - \lambda)^2 \iff (\lambda-1)\alpha - \beta = 0,$$

$$XB = XR \iff (\alpha-1)^2 + 1 + (\beta-1)^2 = (\alpha - \lambda)^2 + (-\lambda+1)^2 + \beta^2 \iff (\lambda-1)\alpha - \beta = 0$$

と対称性より,  $XB = XC = XP = XQ = XR$  であることは  $(\lambda-1)\alpha - \beta = 0$  と同値.  $|\begin{smallmatrix} \lambda-1 & -1 \\ \lambda-1 & 2-\lambda \end{smallmatrix}| = (\lambda-1)(3-\lambda) \neq 0$  だから, これを満たす  $(\alpha, \beta)$  は一意に存在する. これで示せた. よって  $B, C, P, Q, R$  は  $\pi$  上のある円周上に存在する. 今

$$PB^2 = (\lambda-2)^2 + 1 + (\lambda-1)^2 = -4\lambda + 8,$$

$$BR^2 = (\lambda-1)^2 + (-\lambda+2)^2 + 1 = -4\lambda + 8,$$

$$RQ^2 = (2\lambda-2)^2 = -4\lambda + 8$$

であり, 対称性から  $PC = PB, CQ = BR$  だから  $PB = BR = RQ = QC = CP$ . 以上から  $P, B, R, Q, C$  は同一平面上にあり, この順番に正 5 角形の頂点をなす.

(ii)  $CA'$  を軸に  $2\pi/3$  回転させると  $c$  は  $a$  に,  $b$  は  $e$  に移るから  $Q$  は  $P$  に移る. よって移動後の正 5 角形は辺  $CP$  を共有する. もう 1 度回転させると, 2 個の正 5 角形とそれぞれ辺を共有する. 他の回転も同様だから, 各頂点と頂点を共有する正 5 角形は 3 個ずつある. その 3 つは, どの 2 つもその頂点を端点とする辺を共有する. よって  $\Gamma$  による運動で得られる図形は, 各面が合同な正 5 角形の多面体となる. その頂点, 辺, 面の数をそれぞれ  $v, e, f$  とすると, 頂点, 辺の数え上げと, 多面体の Euler 数から

$$5f = 3v, \quad 5f = 2e, \quad v - e + f = 2.$$

前 2 つから  $v = \frac{5}{3}f, e = \frac{5}{2}f$  だから 3 番目の式に代入して  $\frac{1}{6}f = 2$ . よって  $f = 12, v = 20, e = 30$ . 従って多面体は正 12 面体である.

$A$  と  $C', B$  と  $D', C$  と  $A', D$  と  $B'$  にそれぞれ番号  $1, 2, 3, 4$  をつける.  $AC'$  を軸に回転させると, 偶置換  $(2, 3, 4)$  を引き起こす. 他の軸についても同様だから,  $\Gamma$  の元は  $\{1, 2, 3, 4\}$  上の偶置換と一対一に対応する. よって  $\#\Gamma = 4!/2 = 12$ . □



## 平成 12 年度 (1999 年 8 月実施)

### 問 4

多様体の位相同型類からなるある集合  $\mathcal{M}$  と  $\mathcal{M}$  から  $\mathbb{Z}$  への写像  $\alpha$  が次のふたつの性質 (a), (b) をもつものとする.

- (a) 任意の整数  $n \geq 0$  に対して,  $n$  次元 Euclid 空間  $\mathbb{R}^n$  は  $\mathcal{M}$  に属し,  $\alpha(\mathbb{R}^n) = (-1)^n$  である.
- (b) もし多様体  $X$ , その閉部分多様体  $Y$ , 補集合  $X \setminus Y$  のうち, いずれかふたつの多様体が  $\mathcal{M}$  に属せば, 残りのひとつも  $\mathcal{M}$  に属し,

$$\alpha(X) = \alpha(Y) + \alpha(X \setminus Y)$$

が成り立つ.

そのとき次の問に答えよ.

- (i)  $Z = \{(x, y) \in \mathbb{C}^2 \mid y^2 - x^3 + 1 = 0\}$  とする.  $Z$  が  $\mathcal{M}$  に属することを示し,  $\alpha(Z)$  を求めよ.
- (ii)  $\mathcal{M}$  を適当にとつて,  $\alpha$  と Euler 数の関係を見出せ. (必要なら  $\mathcal{M}$  の性質を修正してもよい.)

解答.

□

# 平成 11 年度 (1998 年 8 月実施)

## 問 3

$\mathbb{H}$  を四元数全体のなす実 4 次元空間とする (すなわち,  $\mathbb{H}$  は実数体上の多元環であり, 実数体上のベクトル空間としては  $1, i, j, k$  で生成され, 乗法は, 関係式  $i^2 = j^2 = k^2 = -1, ij = -ji = k$  によって与えられるものである.  $\mathbb{H}$  は非可換体である.) .  $\varphi$  を  $\mathbb{H}$  上滑らかでコンパクトな台をもつ 4 次の微分形式であって,  $\int_{\mathbb{H}} \varphi = 1$  を満たすものとする.  $a, b, c \in \mathbb{H}$  に対して写像  $f_{a,b,c} : \mathbb{H} \rightarrow \mathbb{H}$  を

$$f_{a,b,c}(q) = (q-a)(q-b)(q-c)$$

と定義し,  $\varphi$  の  $f_{a,b,c}$  による引き戻しを  $f_{a,b,c}^* \varphi$  とする.

このとき, 次の (i), (ii) を示せ.

- (i)  $\int_{\mathbb{H}} f_{a,b,c}^* \varphi$  は  $a, b, c$  にも  $\varphi$  にも依らない.  
(ii)  $\int_{\mathbb{H}} f_{a,b,c}^* \varphi = 3$ .

解答. (i)  $B(R) = \{q = q_1 + iq_2 + jq_3 + kq_4 \in \mathbb{H}; \sum_{n=1}^4 q_n^2 \leq R^2\}$  とおく.

•  $a, b, c$  によらないこと:  $C^\infty$  関数  $F : \mathbb{H} \times [0, 1] \rightarrow \mathbb{H}$  を  $F(q, t) = (q - ta)(q - tb)(q - tc)$  で定める.  $F(q, 0) = f(q) := q^3, F(q, 1) = f_{a,b,c}(q)$  である.  $B(R) \times \mathbb{R}$  中の  $M = B(R) \times [0, 1]$  は向き付け可能, コンパクトで  $\partial M = (B(R) \times \{0\}) \cup (B(R) \times \{1\})$  であるから,  $d\varphi = 0$  と Stokes の定理より

$$0 = \int_M F^*(d\varphi) = \int_M d(F^*\varphi) = \int_{\partial M} F^*\varphi = \int_{B(R)} f_{a,b,c}^* \varphi - \int_{B(R)} f^* \varphi.$$

$R \rightarrow \infty$  とすれば, 積分は  $a, b, c$  によらない.

•  $\varphi$  によらないこと:  $\varphi, \psi$  を条件を満たす  $\mathbb{H}$  上の 4 次微分形式とすると,  $\varphi - \psi$  は  $C^\infty$  級閉 4 次微分形式で, コンパクト台を持ち,  $\int_{\mathbb{H}} (\varphi - \psi) = 0$  を満たす. よって  $\mathbb{H}$  上のコンパクト台を持つ  $C^\infty$  級 3 次微分形式  $\eta$  であって  $d\eta = \varphi - \psi$  となるものが存在する. 従って Stokes の定理より

$$\int_{B(R)} f^* \varphi - \int_{B(R)} f^* \psi = \int_{B(R)} f^*(d\eta) = \int_{B(R)} d(f^*\eta) = \int_{\partial B(R)} f^*\eta.$$

$\partial B(R)$  は 3 次元多様体,  $f^*\eta$  は 4 次微分形式だから, 右辺の積分は 0. よって  $R \rightarrow \infty$  とすれば, 積分は  $\varphi$  によらない.

(ii)  $\text{supp } \varphi$  がコンパクトであることと  $\int_{\mathbb{H}} \varphi = 1$  より, 求めるものは  $\deg f$  に等しい.

$$(q_1 + q_2i + q_3j + q_4k)^2 = q_1^2 - q_2^2 - q_3^2 - q_4^2 + 2q_1q_2i + 2q_1q_3j + 2q_1q_4k,$$

$$\begin{aligned} (q_1 + q_2i + q_3j + q_4k)^3 &= (q_1^2 - q_2^2 - q_3^2 - q_4^2 + 2q_1q_2i + 2q_1q_3j + 2q_1q_4k)(q_1 + q_2i + q_3j + q_4k) \\ &= (q_1^2 - 3q_2^2 - 3q_3^2 - 3q_4^2)q_1 + (3q_1^2 - q_2^2 - q_3^2 - q_4^2)q_2i \\ &\quad + (3q_1^2 - q_2^2 - q_3^2 - q_4^2)q_3j + (3q_1^2 - q_2^2 - q_3^2 - q_4^2)q_4k \end{aligned}$$

であるから,  $q^3 = e^{3i\theta} \notin \mathbb{R}$  となる  $q \in \mathbb{H}$  は,  $3q_1^2 - q_2^2 - q_3^2 - q_4^2 \neq 0$  より  $q_3 = q_4 = 0$ . よって  $q_1 + q_2i = e^{i(\theta+2k\pi/3)}$  ( $k = 0, 1, 2$ ). これを  $z_k$  とおくと

$$\begin{aligned} \det df_{z_k} &= \begin{vmatrix} 3q_1^2 - 3q_2^2 & -6q_1q_2 & & \\ 6q_1q_2 & 3q_1^2 - 3q_2^2 & & \\ & & 3q_1^2 - q_2^2 & \\ & & & 3q_1^2 - q_2^2 \end{vmatrix} \\ &= [(3q_1^2 - 3q_2^2)^2 + (6q_1q_2)^2] (3q_1^2 - q_2^2)^2 \\ &= 9(q_1^2 + q_2^2)^2 (4q_1^2 - 1)^2 = 9(4q_1^2 - 1)^2. \end{aligned}$$

よって  $\cos(\theta + \frac{2k\pi}{3}) \neq \pm \frac{1}{2}$  ( $k = 0, 1, 2$ ) となる  $\theta \in \mathbb{R}$  を取れば,  $\det df_{z_k} > 0$  だから  $df_{z_k}$  は全射. 従って  $e^{3i\theta}$  は  $f$  の正則値だから

$$\deg f = \sum_{k=0}^2 \operatorname{sgn}(\det df_{z_k}) = \sum_{k=0}^2 1 = 3.$$

□

#### 問 4

向きづけられた閉曲面（コンパクトで境界のない 2 次元可微分多様体） $M$  と整数  $m$  が与えられたとする． $M$  の点  $P$  の近傍  $U$  上の微分同相写像

$$\phi : U \xrightarrow{\sim} D = \{x \in \mathbb{C} \mid |x| < 1\}, \quad \phi(P) = 0$$

を用いて， $U \times S^1$  と  $(M \setminus \{P\}) \times S^1$  を以下の図式に従って貼り合わせて得られる 3 次元多様体を  $X = X(M, m)$  とする．

$$\begin{array}{ccccc} U \times S^1 & \supset & (U \setminus \{P\}) \times S^1 & \xrightarrow{\sim} & (U \setminus \{P\}) \times S^1 \subset (M \setminus \{P\}) \times S^1 \\ & & \wr \downarrow \phi \times \text{id} & & \wr \downarrow \phi \times \text{id} \\ & & (D \setminus \{0\}) \times S^1 & \xrightarrow{\sim} & (D \setminus \{0\}) \times S^1 \\ & & \wr & & \wr \\ & & (x, y) & \longmapsto & (x, (x/|x|)^m y) \end{array}$$

ただし， $S^1 = \{y \in \mathbb{C} \mid |y| = 1\}$  である．

(i) ホモロジー群の同型

$$H_1(X, \mathbb{Z}) \simeq H_1(M, \mathbb{Z}) \oplus (\mathbb{Z}/m\mathbb{Z})$$

を示せ．

(ii) このようにして作った  $X$  が 3 次元球面  $S^3$  と微分同相になるような  $(M, m)$  をすべて求めよ．その際， $(P, U, \phi)$  を適当に選んで微分同相写像  $X \xrightarrow{\sim} S^3$  も構成せよ．

解答．

□